

球磨地域におけるひのしずくの適正な鉢受け時期

球磨地域のひのしずく栽培における最終鉢受けは、収穫期前半(年内～2月)の収量安定及び収益性の面から6月10日頃までに行う

農業研究センター 球磨農業研究所 (担当者:児玉 賢幸)

研究のねらい

球磨地域では、近年「熊研い548」(ひのしずく)の作付けが増加しているが、複合経営が多いという経営条件のためか鉢受けの時期が遅くなるケースが見られ、それによって花芽分化の遅れや揃いが悪くなることが懸念される。よって、球磨地域における適切な鉢受け時期を明らかにする。

研究の成果

- 1.早く採苗し、育苗期間の長い苗ほどクラウン径が大きく大苗である(表1、表2)。
- 2.早く採苗し、育苗期間が長い苗ほど早く根鉢の褐変が進むが、どの採苗時期においても育苗期間が長くなるにつれて褐変する(表2)。
- 3.収穫期前半(年内～2月)の商品果数は、採苗時期が早いほど多い。また、商品果収量は6月10日採苗が多くなる(図1、図2)。
- 4.年内粗収益は、6月20日採苗が優れるが、収穫期前半(年内～2月)で考えると、6月10日採苗が優れる(表3)。
- 5.以上の結果から、収量性を確保するには、褐変による弊害が少なく、大苗が得られる6月1日～10日採苗が最も適する。

普及上の留意点

- 1.上記の試験では、2葉展開中のランナーを鉢受け対象とし、ランナーを受けた日を鉢受け日とした。また、育苗は、10.5cm黒ポリポットを用いて、ポット間隔を15cm×15cmでおこなった。

表1 H17定植時生育 (10株調査)

区	調査日 (月/日)	新生第3葉				葉色 (SPAD)	クラウン径 (mm)
		小葉長 (cm)	小葉幅 (cm)	葉柄長 (cm)	葉柄比		
H17 6/1	9/21	9.3	5.6	9.0	0.49	27.3	12.2
H17 6/10	9/21	9.6	5.9	9.6	0.50	28.2	11.6
H17 6/20	9/21	8.7	5.6	8.0	0.48	27.7	11.2

注1 葉柄比 = 葉柄長 / (小葉長 + 葉柄長)

注2 クラウン径は、展開葉を5枚残した状態で測定した。

表2 H18育苗期生育 (10株調査)

区	調査日 (月/日)	草丈 (cm)	新生第3葉			葉色 (SPAD)	クラウン 径 (mm)	根の状態		
			小葉長 (cm)	葉柄長 (cm)	葉柄比			根の張り	全体の 褐変状況	底面の 褐変状況
H18 5/20	8/9	22.9	9.9	11.0	0.5	32.9	11.2	4.8	4.0	2.7
H18 6/10	8/9	20.6	8.8	9.3	0.5	34.6	9.5	3.5	2.0	1.6
H18 6/30	8/9	15.8	5.5	6.5	0.5	33.6	8.3	2.5	1.8	1.1
H18 5/20	9/22	20.5	8.3	7.5	0.5	30.1	12.8	4.9	4.0	2.7
H18 6/10	9/22	20.4	8.2	7.3	0.5	30.2	12.1	4.6	3.5	2.6
H18 6/30	9/22	16.1	6.9	5.7	0.5	28.3	10.2	3.7	3.6	1.8

注1 育苗には、直径10.5cmの黒ポリポットを使用した

注2 根の張り: 1粗 ~ 5密 根の褐変: 1無 ~ 5褐変

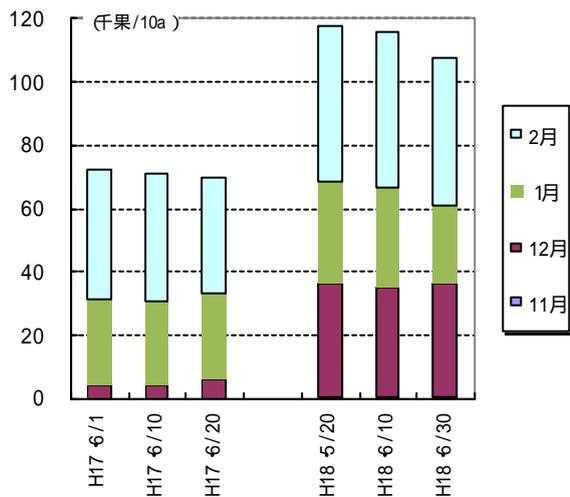


図1 月別商品果数 (浮き種果含む)

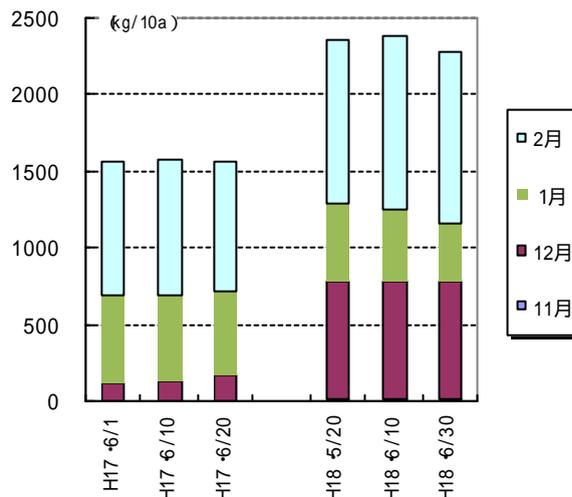


図2 月別商品果収量 (浮き種果含む)

表3 粗収益試算

区	年内		1月~2月		収穫開始~2月	
	粗収益 ¹⁾ (千円/10a)	対6月10日比 ²⁾ (%)	粗収益 ¹⁾ (千円/10a)	対6月10日比 ²⁾ (%)	粗収益 ¹⁾ (千円/10a)	対6月10日比 ²⁾ (%)
H17 6/1	244	92	1,981	100	2,224	99
H17 6/10	265	100	1,979	100	2,244	100
H17 6/20	347	131	1,904	96	2,251	100
H18 5/20	1,091	99	2,033	98	3,124	99
H18 6/10	1,101	100	2,066	100	3,167	100
H18 6/30	1,105	100	1,923	93	3,028	96

1) その年の単価と商品果収量(浮き種果含む)を月別に計算したものの

2) その年の6月10日採苗区を100としたものの